『みいけ二〇年史』を発行

労仂運動の前進に寄与したい

こんにち多くの労仂組合は一〇年史や二〇年史をもっています。しかし、そこには組合の組織を担い、組合史のひとこまひとこまを自から闘った人びとの人間像や生活像は、残念ながらえがかれていません。

三池闘争を闘い、三池の旗を守っている人びとが、人間として、特別な人びとでない以上、組織力の根源を追及し、三池労組だけでなく、日本の労仂運動の前進に少しでも寄与したい。

「みいけ二〇年」はそれを果したい。

こんなおおくの願望をもちながら、二〇年史ととりくんできました。奥田先生を中心とする約二十名の執筆陣の先生たちは、昨年、夏の休みはそのほとんどを放棄されてこの事業にとりくんでいただきました。二〇年史を出版する労仂旬報社からも調査編集費として多額の資金援助をうけています。

多くの人びとの努力が実を結び、二月五日のみいけ二〇周年の式典の日に「みいけ二〇年」が発行されることになりました。

左記の要領によって購読者の予約を受付けます。

記

一、書籍名「みいけ二〇年」A五版（90一段組）一、一〇〇頁、箱入特製。

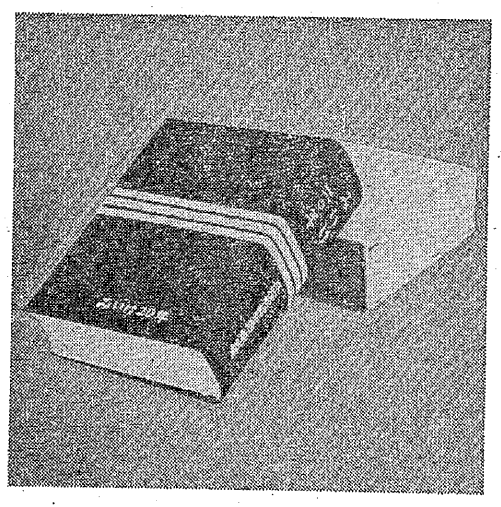
一、価格
三池労組組合員（含離転者）に限り一、〇〇〇円。
三池労組員以外の対象に領布するときは定価販売（三、〇〇〇円）とする。

一、支払い
組合員は五〇〇円二回の給与引きとする（三月、四月支払い）離転者は一、〇〇〇円の一回払いとする。

一、受付場所
三池労組本部、三池労組各支部

一、受付期間
自　一月二十日
至　二月十日

以上



写真は「みいけ20年」の見本

詩　半未亡人

—古閑久代さんへ—

CO患者家族の会　松尾ケイコ

半未亡人
それは昭和三十八年十一月の
あのいまわしい爆発で
CO患者となった夫をもつ
あなたの
代名詞

あれから四年
それに今も
頭痛、耳鳴り、難聴
物忘れ……
幼な子のように
あなたの腕の中に眠る夫に
妻として
女としての喜びもなく
あなたは
深い悲しみにおちこむ

その悲しみの中から、あなたは
一つの光を求めてもがき
苦しむ

半未亡人
どんなにもがき苦しんでも
あなたは生きねばならぬ
それは、あなたにも
二つの宝石があるから
あなたの笑顔を待つ
二つの分身の未来のために
あなたは生き
闘うのだ

半未亡人
勇気を出そう
苦しみはあなただけの
ものではない
合理化の嵐にさらされている
多くの仲間と共に歩く限り
あなたは
一人だけではない
力強く歩くのだ
前を向いて
力強く、力強く

随筆　鍛（ヤブ）椿（ツバキ）

港務　柿坂敏

作曲家のモーツアルトは、一日の中に幾度となく「僕のこと好きかい、僕のこと愛しているかい」と尋ねたそうだ。そうせねばペンがとれなかったという。いかにも人間臭いこの人、私は深い近親感をおぼえる。しょせん人間は、悪意の中では生きていけない動物なのであろう。

このことは、人それぞれのモチーフの違いことあれ、人生という人間関係の綾模様の善意の糸であり、また恥部の糸でもあろう。私は近ごろ、よくこんな想念の虜になるときがある。（俺が死んだとき、心から嘆いてくれるのは、いったい誰だろうか?）。妻、子ども、そのほかに誰がいるだろうか?。残念ながら、その心当りがない。

綾糸のような人と人との縁の中で、一人の人生が終るとき、肉親以外に嘆いてくれる人がいないなんて、なんとみじめなことであろうか。こんな私の気持を妻や子どもに語ったら「そう深刻ぶりなさんな」と、子どもたちは一笑にふした。私の枯葉の〝おののき〟にも似た心境は、若い肉体と精神には消化できなかったのだろう。妻は「それは人間が、生まれたり死んだりするうえでの約束ごとでしょう」と、悟りきったようなことをいう。

しかも子どもたちは、それ以後は、気にそまぬことでもいおうものなら「お父さんが死んでも泣いてやらぬから」と、私を脅迫してくれる友を、私はつくづくほしいと思う。

人間は忘れるからこそ生きていけるのだという人生の法則を肯定しながらも、こんな想念の中に身を沈めるのは、結局、人は悪意の中で生きてはいけないのと同時に悪意を残して消え去ることのできない動物だからであろう。

一枝の椿の花にしか生きていた印象を残すことのできなかったこの人生を悲しむ男に、また真赤なるやぶ椿の咲く季節がめぐってくる。

苦笑させる。しかし、私が求めているのは、臨終のときの〝どうこく〟でもなければ、通夜の柩の前での嗚咽でもない。そんな約束ごとのような涙ではない。つれづれなる夜半、ふと私のことを思い出し、頬を伝って枕カバーに落す一滴の涙であり、早春のやぶかげに真赤に咲く椿の花を見つけたら、「ああ、あいつはやぶ椿が好きだったなあ」と、忘却の果てから私をよみがえらす、そんな嘆き方をしてくれる友を、私はつくづくほしいと思う。

夫婦見

話し合える夫婦に ⑮

人間としての会話を

港務・臼井分会
江口未津子さん（30才）

ひとり暮しのような生活

私たちが結婚したのは、三池闘争中で、組合が分裂する直前でした。結婚して二カ月目に社宅へ来て、首切り返上デモに参加したのが、デモに参加したはじめての経験でした。

その頃主人は支部や地域詰めでひとり暮しと変りませんでした。

ところがその後も、会議などでほとんど毎日遅く帰るので、子どももいないし、ひとり暮しみたいなものです。

主人は主婦会の活動や本を読んで勉強しろといいますが、私が教えてほしいと思っても、家に帰ってからはあまり話してくれません。

主人が遅く帰ったり、組合活動することは理解しているつもりだし、文句をいったこともありませんが、せめて話し相手になってほしいと思います。

家ではワンマン

ヒマがあるとすぐパチンコに行っています。十二月の三十一日に街まで使いに行ってほしいとたのんだら、五時間もかかって帰ってきました。一年の総ざらえだそうです。

家庭の民主化だと口ではいいながら、家ではワンマンです。家のことはめったに手伝ってくれません。

もっと人間的に

結婚当時は、主婦会の会議に行かないとおこるので行っていたし、帰ってくるとどうだったかと必ず聞いていました。それにくらべると今は逆になったようです。

しかしいろんな三池労組員以外の夫婦をみていると、私たちはしあわせなのだなと思います。

主人がいうように〝愛情は思想的なものの上にきずかれる〟ということが本当だと思います。

深さのない、形だけの夫婦の会話は人間としての喜びはありません。

私の文句を理解しようとしてくれる主人は、今はワンマンでも、活動の中で、そして家庭の中でも人間的に変らざるをえないだろうし、私も同じです。

そして長い夫婦生活の中で、本当に話し合える夫婦になりたいものです。

女見

ここにも闘う仲間が

—東京への車の中で—

宮浦・朝日丘分会　森川久美子

私は今度お父さんを家に残し、思いもかけない東京旅行としゃれこんでしまいました。地下数千尺の暗い坑底のなかで、差別、低賃金と一生懸命、血のにじむ思いで頑張り闘っているお父さんを思えば気のひける思いもしましたが、許しを得ましたので家を後にしました。

汽車のなかで、三池闘争時オルグとしてこられた大阪合化労連の人と知りあいました。その人が語られるには「いま私も三池を見習っています。正しい労仂者としての生き方、正しい人間としての誇りを失わず、人間らしい生き方をしている人がいることに、私は頭を下げずにはいられません。経営者の風当りが強ければ強いほど、人間は賢こくなり強くなります。私自身、出世コースは課長、部長と席はきまったのも同然でした。でも人間一生のうち、金のために生きるか立派な一人の人間労仂者として生きるか迷いました。どうせ一生送るなら、自分のためでなく子どもたちの未来の幸福のために生きようと決心しました。そのため、幹部連中の圧力が強く〝たいがいで考えなおして赤旗をおろすことを考えなさい〟と説得されますが、私は停年になってもこの赤旗だけは子どもたちの幸福を見とどけるまでふりつづけます。目ざわりなら、赤旗をふらんでもいい明るい社会にしてからいってください、きっぱりとふり切りました」。

あまり三池のことをほめられるので、いまなおなんやかんやと理屈をつけ脱落する人を思えばくやしさと憎さが倍になって、力づけてくださる言葉の上を素通りし、暖房のきいた汽車の中でも体がぞくぞくする始末です。「どうか最後まできびしい合理化がでようともびくともせず、子どもたちをしっかり見守り、力強く正しい人間形成に努力されることを遠い大阪の地より祈っています。

私も折りがあればふたたび三池に参ります。がっちりスクラム組んでともに最後まで頑張りましょう」と、おたがい頑張ることを誓いながらわかれました。東京へ行く途中の汽車の中の会話でしたが私が身を持って体験したことは、どんなに勉強にもなり勇気づけられたかわかりません。私は仮面をかぶった労仂者でなく、真の仂く労仂者であることをのぞみます。

様モ奥メ

塩サケの味の変わりを防ぐには

塩サケを、はしから切りながら食べていくうち、日がたつにつれてどうしてもだんだん味が変ってくるものです。これを防ぐには、切った残りの切り口へ、濃い目の塩水でぬらした紙をはりつけて、尾の方を上にしてつるしておくと、味もおちません。また切る時は、頭の方から順に切っていくようにします。

塩魚の塩だし

塩魚の塩だしをする場合には、よび塩といって、うすい塩水の中につけておくと、かえって早く塩がぬけるものです。魚を適当に切って、ダイコンおろしをよくまぶしておくと、魚の持ち味を失うことなく、塩気もぬけるものです。

「土筆」

北海道赤平市の茂尻炭鉱の労仂者・峰谷東光さんは停年退転記念として歌集「土筆」を出版した。その中から……。

ストライキかかわりもなく腹へらす子等に昼食馬鈴しょを煮る

今日も来し白き自動車を気づかいぬ地底の友が怪我と知りなば

吾が城に移りて妻よ重ね来し疲れ癒せと静かに想う